書類從

百六十七上

内閣文庫
和書類
一八六九〇號
六六六冊
三六函四架

内閣文庫
和書類
一八六九〇號
六六六冊
二五函二〇架

内閣文庫
番號 和 18690
冊數 666(225)
函號 215 3

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

群書類從卷第百六十七上

浅草文庫

檢校保己一集

和歌部廿二百首

堀川院

院御時百首和歌 稱太原百首 康和年中

題

春二十首

立春　子日　霞　鶯　若菜

殘雪　梅　柳　早蕨　櫻

春雨　春駒　帰雁　喚子鳥　苗代

堇菜　杜若　藤　歌会　三月盡

国立公文書館
National Archives of Japan

夏十五首

更衣　卯花　葵　郭公　菖蒲

早苗　照射　五月雨　盧橘　螢

敷恋火　蓮　沙宝　泉　荒和稜

秋二十首

立秋　七夕　萩　女郎花　藤

荊薑　蘭　萩　鴈　鹿

露　霧　槿花　駒迎　月

擣衣　虫　蓼　紅葉　九月盡

作者

正二位行權大納言兼春宮大夫藤原朝臣公實卿

正二位行權中納言大江朝臣匡房卿

正二位行權中納言源朝臣國信卿

參議正三位行右兵督源朝臣師頼卿

従三位行修理太夫藤原朝臣顕季卿

散位正四位下源朝臣俊重

正四位下行越前守兼中宮權大進藤原朝臣仲實

従四位上行木工頭源朝臣俊頼

従四位上行右近衛少將兼備中權守源朝臣師時

散位従四位下藤原朝臣俊仲

散位従五位上前左兵衛佐藤原朝臣基俊

権少僧都永縁

阿闍利傳燈大法師位隆源

前参議肥後

高倉一宮紀伊

前齋院河内　百合花

春二十首

立春　春宮大夫公實

きたちて　はるかすみ　ゆくかぜ　ふるいまに　ちりまがふ　はなのにしきを　たれかたちまし

権中納言匡房

ふるさとの　ゆきをけさ　はるかぜに　とけてなくなる　うぐひすのこえ

権中納言国信

みむろやま　ゆきもまだ　きえぬに　はるかぜに　ちりまがふ　はなのにしきを　たれかたちまし

右兵衛督師頼

うぐひすは　ゆきをうちに　なきつれど　はるかぜに　ちりまがふ　はなのにしきを　たれかたちまし

修理大夫顕季

うちなびき　ちぶりのいとの　はるかぜに　ちりまがふ　はなのにしきを　たれかたちまし

源俊仲朝臣

春かぜに　いとをよりかけ　ちりまがふ　はなのにしきを　たれかたちまし

中宮權大進仲實

秋まつ枝ゆるがせる風のおとに
うちなびきたちさぬとみるまで

東二頭俊頼

庭のせゝにたちぬ[ぬ]ぬるるとのゝうちのゝ
ゆるぶ代の秋

左近權少將師時

いろふかく八重咲菊の一こゝろ
ちよをまつとはそめるなるらん

前兵部卿長

いかゝとはいはんすゝきのあまたゝ
ぬるかぜにこそ秋はしるらん

藤原基俊

ちぬ山はもゝ[ぬ]みぢ[ぬ]ぬるるすゝきの
ほのぼのとこそ秋はきにけれ

權少僧都永縁

ちぬ[ぬ]ぬるるとみゆるすゝきの
ほのぼのとこそ秋はきにけれ

河内守藤原隆源

うちなびきたちさぬとみゆるすゝきの
ほのぼのとこそ秋はきにけれ

肥後

ほゝ[ぬ]ぬるゝ細谷川のすゝきの
ほのぼのとこそ秋はきにけれ

紀伊

春たてゝ大こゝ人ふとまこゝろ
ぬるゝとのゝうちのすゝきもそつゝ

河内

きぬ[ぬ]ぬるゝ秋はの風はいかゝ
ほのぼのとこそ秋はきにけれ

子日

松のひとえ二葉成雲と子代をこそ君が為にはうけつるに
春霞さちかくせとも姫小松ゆまとふかうは
生初るえつるもけまとそなるまいかとこそ垂れめせる
子日をよいそくせうの君の代の子孫とまつれまのちめふ
君の代も子日成雲とそなりかちの子代成さめよそうんと松の
いけくとも子日成松の葉成ぶかるかとみさるかうかをそなる
如掃葉成ちるにたをりちかれ然ものうさうゆへ
いそひつくるつも松をそなるまいかとうるをそ垂れめせる
子日をとよろこの子孫とのへ姫小松せるを

今年生成二葉の松をそなさ植てふるち後成子代をうそへん
姫へはいそくる子日成小松をそなるまいかに二葉に子代のけそうまる
春日姫成子日の小松をそなるまいかに神をそいのる君のちとせを
姫へはそなくる初の成小松さに植て第に子年成めとおもちん
行末をまつそいそうさ君のうんに子代乃松の子日とおもへハ
姫へこしるけふそなるる小松原おひも未そかうもまいまは
君の代乃千年とのへはる日して雲成ひをうそへはくさん

霞

春霞志のまはにとこそ成つまいおかりやあまの釣舟
つきもこう神なる山成さそひて雲成たちまさりける

をてゝ春ハ霞の川はゝ水のみなもとなる谷
石上物部郡　春ハ霞ハすみなる谷たうまとのやま
みなとゝ春ハ霞さかりなる　霞さかり　橋の里
桜の雪の花ゝかりみなる谷　春ハ霞にけさて霞ハ松川ハ谷
かそ川のいそまはつ氷いとちかう　もそ山の雪とかもめる
ふみさてる松ちつえとくとてハて霞てまるあまはゝ立
春霞ちまちつかひ孫はやもみえぬ　松ちけさ
谷の人まつ雪　さしぬ春のおる山ハ川霞ハ那
はこさりは　ちの山　禁まて春ハたかさ谷
みなの山た川孫ゆゝ春霞ちる松ハちるかくして

梓弓春ハ春ちる川ゝとま川　松川ハかとみなる谷
東海の東谷　春ハ　橋春谷ハ川霞ハてちまちる谷
みなせハ春ハ霞ハこめまていつこるゝみゝ乃山
川とあゝ春ハ東に松谷ハ霞て春ハゝめる谷

雪

春人ハいつまハ谷の雪ハ都ハさ川ゝなくる谷
谷ふかみさゝふるとゝふ山里にふとめつゝさ雪乃こゝ
川ゝとたゝ人はこゝゝゝん川雪乃春ハさくやと
あゝまてゝまさみさゝる山里ハ雪と春ハる雪ハん
雪ハ春ハたけてゝ春谷ハ春ハ谷ハ春ハ

山里に栄乃とさうゝかことゝもせて公不てさハうゝひをの春
ゆきをみゝゆるをハ雪にうつゝまて谷乃鶯春とはゝ鶯
かをとゝめぬ身をうゝひとゝ心ゝとも為くをハ人の志のさうけを
川ゝゝと谷に鶯なくゝるハ山ちゝこゆる春にはゝるゝの
ま地に紫にほゝるゝ風ハ春をけ谷のうゝひ所イ鶯春
風とこゝ春て鳴鶯に春さけハ梅ゝく竹を植て久る
志さゝぬ春紫に山のやまハは春をゝまる鶯の声
谷ゝ梅ゝみ人も為ぬ志ゝに春ハ谷ゝとゝ春ハ鶯春
人めゝそかハ春ゝまゝも山里いさゝひをさゝく鶯乃こゝ志
ゝ遠ゝぬ人さゝゝゝやゝつゝさ和の春に春ゝひをの春

山里に都のとゝせハ鶯に春にけさの神ゝをいゝさうゝ

若菜

雪ハ春ゝて春ひつゝめゝたゝゝぬハまさゝうゝつゝさゝ春ゝ
たゝるゝゝ春ゝゝゝちぬゝゝゝく春ゝつゝみゝゝ雪ハ春ゝゝめ
いくはゝく乃ゝハゝゝゝゝゝ春ゝ雪ハ春ゝ出て日をゝ春ゝ
旅人の乃さゝまゝけハ摘ゝのハいゝく田に雪ハ人の為ゝゝ春
為ゝけるゝ雪ゝゝゝゝゝゝゝ春ゝゝゝゝゝゝゝゝ
みゝまゝるゝを雪ハ春ゝ田ハ為ゝゝ春ハ春ハ春ハ春ゝゝゝ
春日雪の雪けの沢ハ神ゝまゝて春ゝゝめハと小芹ゝて摘
春月雪ハ春ゝとゝゝゝハ春ゝゝゝゝゝゝゝゝ神の志ゝゝ

をせすとさゝ〳〵ゐるかはなをめて誰かつまぬ春はことゝり
鶯はのあまてはなをいてつむせゝらし春はあるをはすゆハあゝぬ
春山はさくらをさをかさつをそつめる若なは沫雪そゝる
さえ冴るをまとをけて春日野ふちはゆるゝまゝぬ若なとて猫
春人まゝかゝをみぬさいまてゝ緑の女の垣根はるかとはまぬ日をおさ
春ゝをてゝかゝ七日はは春日野はるかはまゝ知二葉なりゝる
さゝてゝゝ孫とゝゝみゝをてみゝるゝるかつむんゝ野ゝ人ゝうゝひゝゝとも
つゝゝゝひゝゝゝゝゝゝゝゝゝ遥かゝる千代をゝゝて聖人のゝゝかゝ

雑言

ゝゝゝ御日ゝ人ゝ山はゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

春風は谷より谷へ吹ハこゝまでこゝまでと梅のまゝ雪
ひらさゝてゐるもかゝハみえぬかよきりへの岩ハ形をなしまる
東風のまゝこうちをけて梅やゐるこゝ命あみ山へ内里
春さゝて八日経へはまゝと岩ハ人まこ梅まるハさえうこ知うれ
けきうぬぐい（きうぬぐい）ひとうへハ春さへるれ梅まこハまこもえ命ぬ為ハ梅ハ

梅

梅うえを神なつ〳〵みこをるこゝうこ梅まこなく雪乃出梅
白ひまこ梅つくこをもう梅梅こまこもみうぬ春のよ古月
つらわる垣梅の梅と春うへ見こをこくる春れ山里
今ちハ梅咲宿ハんせんまこ梅ハこさまこ人もあるこう

梅梅ハこうすれこうる春風はたうる神おうちうまある
知ハ〳〵梅れ白ひま神まこみ行こうちと人はこうせん
春雪ぬれ春咲梅ハ宿る雪ハ梅れうこ知こみゆうえうを
梅梅ハこうこ白ハ春ハまこうこ梅梅こうこ
梅梅ハ山はまこ垣梅れ宿ハ人ちうれ春こうこ春
春れ春の月ままこる梅梅たく春こうこ人こうる
春雪ぬハ白こうせハるこうれ形端の梅こ流ライいこ知ハ
梅梅たこるたちの春るれまこけこ咲風ハ白こなるこうれ
梅うえこ知うこ神のうちうハあやる雪ぬこあこうれ
ハ川〳〵咲こる風ハたの春ハ垣梅の梅れ白ひなる梅

待人まちの川ぶちなる梅の木の梅の匂ひの色〳〵こけまさ
梅うめ花白あるうへハ雪路ふみ人とめ梅ゝゆきそやどまれ

柳

紅まさる紅梅さくる風ふきすまいとうさけるる青柳の糸
さかぬ花ぬきみの中柳たく春風のけつるなりをる
春風ふきうち柳のゆるぎうちに光かゆるけハ雪そさうゝ
さかりの春はまふ〳〵もまちそ風ふる春柳の糸
さかぬ山に柳の糸と深かけてんのまにうせそさくる
ワう霞乃一ち柳春人まハ吹る風ふう川みさまけり
あさみうら春はさくるに和ぬふ春ふう柳のうつしてみる

中ゆう春かつゝ志ゆ縄仁せよ川そひ柳風りかみるる
四ゆ山の柳乃ふきとめひよやこうちうゝ青柳の糸
佐ゆて辺ゝ川そひ柳春人まハふとゝもゆそうせるゆみる
春風ふゆみるゆゝゝみゆるうかゝ川そひ柳ゆふ初うまて
春柳の糸ハみうち武みゆまてやみまてけうる二月ち風
河そひ乃柳の糸の春ゝ〳〵波ようこと武ゝ〳〵ゆゝ
青柳ハ糸ハみうち武みゆまてやさくる風のけうう
風ゆへ枝うちるひゝ春柳のいとゝそ春武ゆる春ゝ
青柳武みうちの糸ハゆゝ武ゆ春とうる春ゝとゝ武

早蕨

春日野の草はつくしもみえわかぬ小ぢとなりてはるの草のさわらび
外山ぶかい峯あけぬるかすみのそこのさとゆるさとしひ
春は田野にてとあるもうたがはしくせしもおもるもしひさしく春は
ひとしのいまるやうくいまくまいそもえもるやうくに
紫乃廉うちとくしひ春はなかあるやうくしひのもはけめて
春山のもとをはしゆるさるしひいみ春の春や春なるん
姉はたみ春はるはかまいかりとやくとみまふもゆるさるしひ
春くまとれくしかくもさるしひいかりおとるはあるんとすん
面姉まとれくるまさるはるしやはけのくさるくあるん
春くそ春はけのあるかんまけるえいるやうくしひう春

こゆまはれけのくはれかやくしひるえいるまとしもるくるる
花火春ふいるとえいるさるくしひのいあるえかりあるんとすん
春くみまるやちくはるしひのおるはれるえ出はるる
花火春ふゆるえ出まるはるしひと春くるくるくるくるくるくるん
ちるはゆくはみるるふるくるくと今るえ出るはるのるくしひ
武義春ふるくるくるくるくるく

[illegible]の花のみちのくもみなまた八重ちりまさるやまざくら
櫻花句合せ
櫻花句合せ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

春駒

[illegible]

小笠原ぬしみちのくにまかりけるに、あまたの歌
かけるなかにいとうるはしきまきあるをみて、
春の日のいとのどけきにこゝろのうちにもの
思へどかすみのうちにうぐひすのなくをきゝて
我せこがたれかはとはぬ春の日のかすみの
衣たちぬのみかは　今は生れまほしきものとて
千鳥なくかすみ　歌もまた

帰雁

雁の列は雲とまがへてかへりゆくなり
城路はたゝかへりこゝろ井にうつるかゝ

者とにうつるものをなるんもそこにはすまじうつる
雁のこゝろ井にむすぶ雁の列のはをみてとゝ
人なるこゝろまもるものとちりぬるをこゝろ
ちりぬるやいかくもかりはすまねをいなとゆきさ
いうるまの雁はかゝゆるこゝろかりはやこゝろ
雁をまたのゝ雁も今はとて海の雲ひとつ
なるこゝろ　雁合はせのうち海雲こゝろ
雁合はせこゝろ城路はみやこふまうるはやこゝ
世中はいかくやいつくゆる雁なるこゝろ
雁金はこゝろ雁なるこゝろ

沼あるて春もおうれにあり此道ハ城路はうえる所をなくなる
さきをけてをを弁さるふ沼る所ハ沼をのぼる
敬如とみるやうの刻をを年をへてをしも敬之人か所を
うりけるあるひなるうれをを人道ハ水をとみすてをうえる所を

嗅石

をを川人あるてうえりはよ脇こを野ぶ刻人せなるをこれを
ををこをを牧馬を去けをををを信田社藪のかるをををを
ををうををををるけをををこをあるををに人ををををを
つをををを去はをを雪をあるをををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを

これをををる人をを山ををををををををををををををを
をををををををををををををををををををををををををを
東海のををを山雲のをををををををををををををををを
人新をををを地人ををををををををををををををををを
鳴をををををををををををををををををををををををを
松尾をを雅をををををををををををををををををををを
小東ををををををををの嗅石をを山をををををををを
ををををををををををををををををををををををををを
をを人ををををを山ををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををををををを

なくとそいふなりまたとまるの條をいふやうにおもはれまたあるべ

苗代

苗代とは春くさまうするあるの事にあたれはたとへはこゝにあり
苗代の山田は小田にあらあるべくしてまつ人のあるやうにあるべ
後の男は苗代うゑをあせをとして今とはなる井にはおもとある
小山田はあるくのあるをはあるべ苗代をとゑをまつるべ
小山田に稲をうゑすべ苗代のあるはなにまつをせ川なるべ
はたけのかたはらにあるべ里をみなかまとなる小田は苗代
谷あるをせくあるにいるべしてまた百代小田にあるべ
秋なるべ家はをかとびをまとるべ井に種をとゑ田にあるべ

ゆふべをいあまを田はをとゑ稲やうはあ苗代のあるとまうせうをは
をあるべ山はは小田の苗代をあるけのあるとせはをかけはあ
家妹あるべ門田にあるべ苗代をせはは苗代あるというあるべ
白髪のをとゑをうゑをまをいるべ小田にあるは苗代をいをとなるべ
くはあるはあるべ稲の苗田はあるべいをけるをあるは苗代をは
みあるせはは小田は苗代をあるべて稲はあるべをとにあるべはけるあるは
後の男は苗代あるべはあるべをあるべをとはいをとなるべ
あるべをあるべをあるべ小苗は苗代あるべをとをあるべ人あるべ

菫菜

むらべ妹はあるべ小あるべにはあるべはあるべ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

東路のうちやの沼乃杜若をこめてもうゑにうるゑ
東路やいそのの杜若神のいはすすゑをこそふみん
鳴海のつゝ池へ行のうつ
鳴うらの沼のみ沼の杜若人もとめ行へきかつのうらは
むさし池杜若をそうつる杜若池のぬまをたゝひのうら波
信濃あさ波沼の杜若あうぬ色沼人をまつとまつぬ
物人の和するうふ杜若の岩ぬ嶋どこふかりて杜若をうる
池のと杜若をそうける杜若波をこうとおりかけうる
みくりもふ波へ杜若をうる杜のくる人ことふめそとやいあ
をもに伏人の里に杜若んをうるゑ杜若をこうる

物の地名杜こゝふそふかりたうすゝ宿の杜若をも
杜若物の波へ杜若をうるなにをもうるんなるん

藤

かけ〳〵地いろうもゝ藤よりとゝ地のうちあこ
みさのより藤ゝ白ゝ藤の色いうるをけるみゆん
ゆゑひく風の紅色のとけゝ雲ゝ紫にうる藤波
墨江乃雲にのまるふちゝ風ゝさりて波やおるん
松浦乃みくりとそ〳〵ゝ池のむらゝ物ゝのる藤波
濱雲ゝ波にのるゝ藤波ハ人ゝそ〳〵ゝうけ
岩の上ゝとゝ田子ゝ藤波岩波ゝ

春さてゝいんせんに　のぼりける　後鳥羽院御製

春物まと　をしせぬ雲は　なけれとも　はなのみゆる　後鳥羽院御製

春日山　おろしはけしき　ふけぬれは　はなの白波　こそ　後の波咲ける

むらさきの　ゆかりの色に　やそしまの　後鳥羽院御製

宮ぬ　ゆかりの　和歌の浦　後鳥羽院御製

住江の　岸に　のこる　後鳥羽院御製

すみのえ　雲に　うつる　後鳥羽院御製

海の　底　岸の　まつ　後鳥羽院御製

むらさきの　いく　ふかき　後鳥羽院御製

歌　後鳥羽院御製

我宿を　なとの　里人　とはぬ　なく　みしの　後鳥羽院御製

春　柳の　絶間　なし　後鳥羽院御製

岩根　こし　清滝川の　後鳥羽院御製

惜　なく　川の　小川の　後鳥羽院御製

歌　後鳥羽院御製

岩　松　後鳥羽院御製

惜　なく　春　後鳥羽院御製

風吹　波　後鳥羽院御製

山の　白　後鳥羽院御製

沖の　岸の　後鳥羽院御製

鶯のなき始めはかうぐいすのこゑ人いまやとまれり
山吹の初咲はかうぐいすのこゑ人いまやとまれり
さくらの花をとめるうぐいすの小鳴ぬ春の小鳴ぬ
初てこそ白ひまさりけれ
やまぶきの初咲はかうぐいすのこゑ人いまやとまれり
くちなしの色ぞさけるうぐいすの小鳴ぬ春の小鳴ぬ

三月盡

ゆくはるをとまれとおもふこゝろのうちにはかうぐいすのこゑ
たちもとまれとのこゝろをもしらでかうぐいすのこゑ
あさなゆふべに日数ゆくはるをとまれとおもふこゝろのうちにはかうぐいすのこゑ

さくらこそ春はさきぬれ一枝の花のうちにはかうぐいすのこゑ
初ものこゝろをかけてかうぐいすのこゑ
なほとゝまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
はるはいまはとまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
我宿をいとふことこそとゝまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
橘花の盛をみんとゝまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
あやめくにかけてかうぐいすのこゑ
春ぞとてとまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
春ぞとてとまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ
春ぞとてとまれとのこゝろをかうぐいすのこゑ

春はあけぬとうたがはるるかな

夏十首

更衣

夏ごろもたちかさねてすずしくなるまうけのたちとも
夏衣ぬのの袖ぬれぬさうへて春はすぎぬるかとまがふけり
すずしいめ春はうけまて夏衣いづれのかたをとをとをぶ
夏衣たちかさねるるふにぬるるかはんはまをみ春はまぬ
いづくとかたちかさねるるのころ衣ぬとへは夏はみゆるへう

ぬるるとみの袖はぬるるかとへはまをみ春はまぬ
れみるるぬれぬるるかとへはけさうふかはるるみあり
夏衣たちかさねるるのころ春はうるみあり
ぬるるかとへはけさうふかはるるみあり
いづくとかたちかさねるるのころ春のはるみとあるへは
ぬるるかとへはけさうふかはるるみあり
春はるるぬれぬるるかとへはけさうふかはるるみあり
春はるるぬれぬるるかとへはけさうふかはるるみあり
春はるるぬれぬるるかとへはけさうふかはるるみあり

うすさうのはたちとあそけうの夏衣さるより人やんをそうん

卯花

神こまてれはまこも水まこの白波に卯花さけるうこ垣すう宮

夏ハさのをちた垣根のうた卯花のよるさく雨をさうはこそうの

うのはやさのあるうん白雲の波はのうとみゆまこハ

卯花の青葉もみえぬ時なれはまこそゆくる垣ひとそとみる

ふもゆ〻猪機帝とおりけてさしうこうとみゆる卯花

卯花さけるこへをこえ鶯はるまをとうるんはこそすま

うた花さ〻〻ふさけるタ雪ハ猪の垣根を月花と言る

卯花も弥さ花ものうこそ花さけるとはさも花はゆ雪

家猪ふうの門の猪根ハ卯花さける垣根ハすれうのうる

卯花のうこゆる垣根ハ布さうこ時の里ハんはこそすま

やうみまこと月のえそうこうる卯花さける山路の雪ハ

舟長はうこうこさける卯花ハ何はうとうるみる

はまこふハうこもみまこハつけゆん我身はあと咲る卯花

卯花のうける垣根ハそうるまこ夜ん花こそすま

山うの垣根をそうる卯花のおりはうのうん雪をを

卯花乃垣根ハ夜ん花をたをれ乱ふみゆるやま里

蓼

弥生のうん花うしの蓼をんはゆくるゆうゆ世うる

大元乃日新日おなく神山のうへあるとなり
あるひとのいはくこの葵は神代よりかの神山に
日新山なる葵はうつりみいかなる神の去るかの
昔よりの武とあまに葵まかけてこの山神のちうひと
葵草行てはるくこうとのひとなるうみはあるしとこと
神山のとなく葵とくうつりはくみとのみあまにかうはは
ようふイ
のふ人まはおとるのみゆる山川のおとるのみもあるふり
かけまくもかしこけるさいちやゆる神のみあまにあひせり
とかまるのうちひとまる葵まかけてとのは神代をを
葵草とる日は神代ゆのうの新しひとはまかりかるかる

ふこしに葵のうつりとる人を神代をとかのうつ
神山のとるとこのかつてせぬ人をかの
とるの人乃はさん葵はちとやゆる神はをかるせそう
をとて松乃小山は葵こそ立かこうぬうこうりけま
葵草いのるかけてこしとは葵とあるとは松はこうあ

郭云

はまこしさはいりやおかはは山路はうへ一あるとは
我妹子の祢てまはみのの月面にあけてそさなく山時る
こうしはしかこはいはやうの少人こうしのの平とこ
結すくすとふるる時月夕言はおこうこうまま

郭公なくなくうちすぎたる一あしにあけぬとさへ人は
ゆくすえをとゝのへかねぬ時なるこまぬよこ山すげをもとめ
我宿の雪のうちをやとる時ゝ山時鳥あちこちなくなく
五月こゝ八藤田の藤の時なる末待ゝ手枝ゝ数ことに多け
久こゝ八あまの山ゝ山ゝゆこさかけ神のまふくく
あしたゝび猿ゝ恒孫ゝ時なるあけくれ日なるまこゝ八やゝ川まこゝ
一ゝのさうゝ海ゝ行ゝさゝ孫ゝ松ゝ山ゝ小猿孫ゝ
有ゝ月ゝもゝや出ゝ山ゝ時なる今ゝ我ゝなくゝなる
さゝ出ゝ人ゝ行ゝ孫ゝ時なるまゝ川孫ゝ行ゝ山ゝ出ゝ
山ゝ物ゝくゝたゝ川孫ゝ孫ゝ八孫ゝ孫ゝ孫ゝ

我宿ハ新の芝の入ぶけ（入口）まで畑けるあやめ也（なり）
さてぬさに菖蒲葺とあるあやめ草小ぶくあやめと記（しるし）さてある也
扨また男の袖よりかくるあやめ草（菖蒲）ばかりとやんのみなん
めさけ（酒）さ者ものくあやめ草記さてあるさ也
あやめ草ものくあるを世ものくひる花なりさ
春ことに咲けるつさせぬを世ハさハあやめ草（菖蒲）
ほやめ草ハ水ぬ新ものくあるさ也
よもさのあやめ草ハ水ぬ新ものくあるさ也
あやめ草の記さてあるを世ハ
早苗

いそ地とまで今ハ早苗もおいつらん田ゑ植ハ松ハ去ることも
早苗とる深田ゑ植ハ松ハ去ることの
ゑ植ハ松ハ去ることの
ゑ植ハ松ハ去ることの

あつれといてとそそとんかるすれハ山田ハ苗おいもこそすま
ハ苗とる田ハ高ハ苗代ハ水ハけまとも苗代ハ神そなまとハ
ハり田ハそ代ハすとうあとハたくひもやとそそハ苗とる
田ハ代とる苗とハまとハ和いてとうとうそけ家ハ苗とせ
をくまてと山田ハ苗とる田ハ山ゆ振ハ水ハ代
ハ苗とる田ハ代とすそハあくれハまとあとのとおとる

照射

五月山ハ移ハ所ハんせとうハ代せおもみまといるせ
とうとうするとハ嫌うハ所ハ代ハ高ハのハとうとうすハ乳あひ
をまとハ九五月の山ハ代のおハとうとうするおそ思ハみえける

とうとうとそそ五月とうとうとハまとハ思ハます男ハ義家山へハ出あうとうとん
五月やみとうやまハ紫ハとうとハハ雲ハ出えまハ思とそそみる
ハをとうとうの松ハ出ハあへくハ立山ハゆるとうとハとうとう火
あ沢ハ山すとハ出ハ家ハとうとうとう

さ月やみをまれ星とみえけるハ康平の初いるうり也
うり〻さそくやまれけるもの康とまりけるまていをやうゝん
和歌うゝ〻ほのゝさ〻ふるゝ康のめとゝもあをそ

六月廿日

諸人の志ゝ賀ゝ物ぬゝん正賢ゝのさみゝ〻ゝまろう
つゝさゝるゝ小廿日ゝ志のやゝ日ゝ月廿日にいそかすん夏ゝの所
こけぬゝん志人合ゝかゝうゝも六月廿日ゝあまゝゝもみゝ廿日ゝ志ゝ
さみゝ〻ゝまにぬまゝ志ゝ姫ゝゝこそゝ海ゝゝ〻ゝ人ゝさかゝゝ〻ゝ〻ゝ
ハゝゝ〻ゝのゝゝふゝ物ゝゝそゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

盧橘

なことに梅を匂ひのる一木うゑにうゑもふけとも
さうこさやみやつまれ人きさまうとと花橘の香をあくるひ
かけ〳〵さ梅の梅り香ハさもあ〳〵ぬ人のかをちぬ
立身やこゝ吹くる風の匂ひをと梅をと人ハ去〳〵ぬ
かをの梅や匂ふ月やま時をすきえてすくあ
夕間ふまとさてる宿は梅り梅をくかとにあるを嫌さ
あるうう人ハ花ハ咲をハ梅ハさ月きのおにぬうんさや香
梅りこの丸をのハかやりる香ハこをとおのるを花をあをる
吹風ハかけるきうかハ宿に梅りはりをなるまを

りうこの梅の花ハ梅りはりをハ梅のはるかをまをおうを梅のすをとあ〳〵をを迄ハ
苔ハ人の吹をとをりまを梅ハ神をしをみ梅ハ
をうをハ人の花をハ梅りはりをなるハ
梅りを梅のうをまをハつまぬ神をを人をあやをる
あ〳〵を花梅の咲るをとをを人をを人をとをひあを
五月やを梅りをりるハかあやを行く人りまをこををを
かけをを花梅の匂ひをひをを神〳〵なけをを

螢

雅時の草紫ほをを栄をハ草をまを井の吹りをを
五月雨に草の宿ハ人りををを栄とをを蛾をりをを

芦垣さしかこいまさしてこれをこそ屋に軍いかんまん
茅垣さしかこ海茅まつ見れば屋とひとつ屋ゆふ
大井川せゝにぬまかさかり火とみゆるハすゝ屋也
歌とてこれをこそ屋とあ川かてもみぬ世ゝとゝとうるまる
うさうや川八十住男の四ゝ火ほうふハさよ屋のとうう
家ゝもかさねにかゝる屋うかあれてつへさ成世とかりふは
五月雨に屋ハ朽ゝうの家宿の蓬う物ふゝうこひうふ
雨風ふかぬまのみまさる秋雨よりひとに屋とひうふ
行屋夏ゝ歌とゝふいうゝめて蛍ゝうこんゝうるゝん
いゝ人ゝまとにあつめ屋とも入ふ書井ゝ畢ゝとゝみる

かうまもり河ゝすゝく屋といさゝふまゝるおうゝとゝみる
うゝひとみゆる屋ゝ光うかゝ山ゝ出屋とうけゝとみる
風ふけハ海ゝの屋ハみゝるまゝと記ゝうさゝえぬ屋也ゝ紫
海ゝにいまゝうさゝえぬ屋うかいうゝかりゝうるゝひなゝん

歌屋火

ゝゝゝ火ゝゝゝゝゝゝハあちゝゝゝゝひの屋と物ゝゝる
すゝゝゝ者ゝ物すゝる歌屋火ゝ蛍ハ屋ふ物ゝる
屋のまゝゝゝゝゝゝあ物屋火ゝゝふあひけゝゝゝ
物屋火ゝ蛍うせ記屋ゝ我ゝ物ゝゝゝゝゝ
我妹子にいゝゝ屋せゝゝ孫ゝとのせ

牧を火の焼のみそ山川の世やうに成ける人世を
山川の篇をとそ世人をくゝ火の下をえんのこする時
世をあくるに人ゆる牧を火はしひむせひてすんこゝろ
雲かゝることゝち煙の牧を火い焼生ともみえぬ世を
紫はやのくいはは高ふをくゝ火は焼うせさ高は多
さゝぬくゝふ高ゝ世やはすみをくゝ火は焼のこゝろせさ
人をまこゝふとゝろふ牧を火はにゝうゝ人化こそまを
いかをとをはとゝとゝはけふひかゝ牧を火さてぬ後やを
牧を火をまちかくれてゝ山後のをの道焼ふむせふをも
後の男はをふる牧を火はにゝうまて世とやゝをゝ人

山川はの面ゆをる牧を火の下にこゝうまてやみぬをふ

蓮

池ふにゝうふ蓮はゝ人ふこそ人ふ生ゝまぬ世をなゝけ蓮
ふゝちをもけゝうまぬ蓮はをあまをれるんのうちゝちゝのみゝ
ふをゝるをゝはゝうを紫の池はをゝうやまくもはのゝ
ひゝをふゝうふ紫はの池のをちゝゝ紫はんゝをけをも紫さゝうふゝ紫
はをあをゝはふる蓮をはふる我ふはやゝをとをゝ人は
ゝをあるゝはゝをゝ世はふのまゝ蓮のををゝをすまをやはをる
蓮はは池の蓮ゝ紫をゝをゝ世をゝをゝをゝゝゝゝゝゝける
ふをまをはふのゝをゝ紫にゝるゝはは世をゝをゝゝゝゝゝ

くもこゝろ小舟(こゝろイ)にしたがひて浮かれゆく海松(みる)のうきもなし

蓮葉にうへゝる法の花なれはまことの池にあらそふ

浮世にはいさゝえなかさえも蓮葉にやどる露ぞ玉

いろ染てはこまるゝ水に生(さゝ)ぬ(イ)るうるはしきまれなるのけ蓮さるゝ

蓮河ゝ法のさゝ小さるゝ人のこゝろとゝとゝ

蓮葉のよ蓮くも白蓮池のんやさゝとゝむん

あさゝみいけ蓮の花さるうこれ世のものとみえぬあるべ

諸人をすゝとゝ蓮葉のこゝまとやうさゝ小川

氷室

夏まちて氷室いとゝ深ませ雪とゝ蓮葉

六月もすゝしかりけるゝ氷室の雪のあるよりはあらのやゝ氷むろ

雪ゝ人山代のうちにゝ氷室はうつむ氷室けぬ世ゝ

たちとまる石井神のすゝしさは秋ハ氷室にやどる(なるへイ)こゝろ

夏日すゝしかりけるゝ松の清こゝゝ氷室はゝ

六月の雪はゝ氷室はゝ

法げのふゝ氷室はゝ松さゝすゝさ氷室山ゝ松

夏はみゝのすゝ氷室ゝ今も絶せさうゝ

まゝ氷室ゝ氷室にはゝのゝ川ゝ

夏はゝこゝさ山代のゝ氷室ハ夏はゝ山ゝ年にあゝ

立ゝけて照日ゝ氷室ハ夏はゝ氷室ハ夏はゝ

名月おもしろく歌堂なりにいたりてのち歌をけしあるん
をさしみのしゝ歌と堪忍をもて歌堂といふをもてはる
歌なりて多年荒屋も清せりなる松の勝なる歌堂とこゝに
夏は月の歌堂とせんにあるやもくにすきさるは歌あるをもて
こけ深くもうゆかなくてなるゝよりあれ歌堂をもて歌堂る

泉

六月小岩のもる清水むすとて涼風の風とはいまをもてやの
八月むすてもいけみうにむすてもて松のもる清水夏も連
涼なるをもて岩のさよけをもて歌堂にむすこゝもかこゝるもの
夏は月も泉はなるとこゝもせて物をさるる

むすてもて扇は風もまをもて松のもる清水すゝりもの
弟なるをもて岩なるをもて岩のもる清水むすこゝ
新みをもて岩やもゝ波のよするを板の清水むすこゝ
こゝ井はもゝ清のゆこゝをもて岩はもゝをけこゝ
月はなるゝ夏は水のすむ岩なるをもて夏なるゝ秋
夏は月もすゝりもるを岩をもて清水むすこゝ秋は
いかをもて岩なるゝはゆの月くゝこゝとはるゝのすゝ
むすてもて秋すゝくなりゆくは岩の秋のすむをもて
夫清水は秋をもて岩にすゝくはるゝ
さゝをもて岩にすゝりもるを夏の秋はいかの底はすむ

神とも申すべき家と成て夏と申もの侍
人もみな夏の相よりうる家とハ大神宮の夏と申
おうしく

荒和祓

河の瀬よりかしこくしくする名高きさくの神もんよすし
松尾のとかせの名ふかき祓して千年の命のくてうしん
夏ちくしく天津社の神うけハ我とふことを宮にさかへよ
祓時ふうちくまうみ祓ひとすのぬさ出る多祓
六月の月をも祓おるひさかるしのちくしくせぬ人をなし
夏月よりうしく祓の大麻かしこき川岩根の波うとをみる
八百萬神もかうよなるちはんくすのぬさの出祓しつまへ

さくしくなるあさちとかうしく人よそいとも第をるかしくなる
麻の紫にもかこと人をそたけそ六月ちうる出祓をそする
いうしくのさくしくなる神さまくの出祓ふおこひとそくく
みな底の清さなのまにいそしくあることを神うけつく
うとうるとたかいの瀬ふかうひとそふこのちくしくまうせう
千年まそしくなるめや六月のみそひ夏ぬさいのる出祓ふ
夏ちうるゆくしくふかまの瀬波ふ麻の出祓とせぬ人をなし
ちくしくと大麻をそ夏ちうる河のせことに出祓をかまる
河の瀬にうさとは紫の六月の出祓ぬせにまうとちくふうる

秋二十首

立燒

ことさらに久方の天の川霧たちわたる秋の初風
なまじひに秋の初風たちぬれば
まちもとめてかりがねの
なのみかるとあるは吹風の言葉にて秋の元にたつる
秋はまづ秋の風なれば
夏は秋のあるべき秋の風を
秋の川とはいとなつかしきやまあらの萩すゝきいたるまで
夏の野の草の花ばかりの
こゝろとなけれ秋のと紫にはせふさて秋ふかうとよつて
吹風の秋と紫に当る伝てかぶせて秋の川ひしぎけ
ぬるうのうてあるのみる者ふ秋さあと秋と紫の弱るかと
夕霧は夕の霧といふせん夕ふかり秋よりあり初とおもへ
秋の川と今ふかる風の言にすしやけさいこゝろもうさ秋付
秋はまづ燒立て焼るまは風の言にまに付うけ
秋の川ふるもしるもなしこゝろすしやけさこゝふかゆく
川ふとけさは身に染ひ風ふて秋ふけりとおもひたる
七夕
天川遥かにあるさ七夕にあへぬ色にこゝろかさまや
秋川夜の七月もあるあとなとと初秋とちこゝろ初え

織女はなれるこゝろもしらぬ雲をそなたにあらぬ
ものとてはなれぬ雲をとまりの秋のうらゝと
天の川の岸に立て牽牛織女の二星のまもりて
あるかの岸のこちらかたのうらゝ
春の日はいとさやかなれとも
波立ぬ海やとのうちに舟よりて
織女の人る袖の上にはくもりなく今宵はさ
織女の天の川をわたりはてゝ
牽牛織女の逢ぬ夜の涙やむらつゝも雨けの雲
織女の天の岩戸をあけてこゝろやいとはいそまつる
天の川の波の上にゆめ春の日のつまとゝ舟岸よりはなれ
夏の日もあくてはつゝ織女はんのうちにそなたをうらゝ

中くしやうゝゝやまとこさい織女のさえ人あひみる歌の地
七夕はあまの羽衣うゝもあつてもあつ歌うや彩はとゝ
織女の逢瀬のなつかしまま人あく系はつこさ歌うに
こひくてこゝろひとつかりや織女の船よりはなれ
萩
ひまも彩く美萩はなれる秋の地ゆさすりも嬉うり
河のうに鹿の声ゝみけてうゝうゝ鹿秋ゝさのくる
秋の地ハこゝ小かゝぬ多ゝ彩はゝさ地のうゝれ
二葉より彩うゝ鹿ハ声ゝあゝ声地の村ゝさ地咲日うゝ
萩うゝ地声ゝう鹿ゝうゝめゝ春ちゝゝそみまくりゝ

住吉社頃の小萩まをしてなみのおもへみるまをれ
みるもかりとそこにさけるはぎうゑやせさいかる雲はたをうみ
秋萩の赤紫なるはかつさくまてもなをすりゝ衣うゑ
時なるこゝろ毛ゝよりうみやさ野のあしたはぎはもとゝよ
秋夕にはなるこゝろあるはぎの秋はなりさい
朝雲はうゝりひぬへ小雪原のもとけする秋はぎ
秋ちさはぎのもとゝるはぎ雲はをりをりをうゝとゝみる
野辺や秋とくもとみゆるはぎ見ゆる芦野の萩原
志ゝゆひはるはぎ秋はぎは今を細やくさかりゝをる
雲雲は志ゝ人ふくき秋風ふみさまてさける芦野の萩原

言葉はをとりは秋さのもすりうるさぬ人をかさ

女郎花

ゆさそみんむりひはへの女郎花一枝はもはしもはさうるはい
もとゆひの葉をいとゝ姫はるさとはあるやさ
夕さまは伏見の野への女郎花おもとくへさんはをせ萩
雲志けさ野のさゝはの女郎花一枝おん神をはるしも
秋雲にうゝまはをのゝ姫はるはよい匂へとゝあるふ
小萩衣所家神もあるものとあゝさ雲けさ姫はるは野
いさるみよ今はゆさみん女郎花志ゝふはとうさあくとゝもは
みゝはゝはゝはの女郎花さゝまはて人よゝゝをうるな

人のもとにまかりたりしに女郎花のもとに
夕暮はたちかへりつゝ女郎花
あるゝ野の人もとゝめぬ秋風ふきまさりぬる
秋の夕べとて家をとゝのへる女郎花今さかりなる
ものゝ枝よりのぼる白雲にぬきこめる女郎花うゑ
みし人もあまたありやらの女郎花秋の野山をまた
女郎花匂ふ野べよりいでゝ旅衣にしみぬべきかな
秋の野に家をもとめぬ旅人は女郎花をぞ
落
秋風ふきてむすぶべきあるべしいかゝ家やゐ色まさるべし

ぬすまるゝ物よりいでゝ秋ふかきもとゝ
花すゝき今はかりかりぬ秋風ふけばとゝ
むまたてる志のをすゝ花ゝ
風ふけば秋のをすゝき穂に出て家おもてに秋ぞとゝ
志ゝ風ふきまさる宿の秋すゝき
風をいたみ靡ける野の花すゝきやまぬ
秋すゝきなびくとゝ家とゝ
一すゝ風ふかぬ秋すゝ花さかぬ
みすゝ野ゝ出ゝ志のすゝ風のさゝ
靡ける野べとゝ家のすゝ花

秋風のあはれをしること、とりそめてはべるべし。
秋すぎまゝにくさ〳〵の色と、おのがさまゝ
なるを、秋はまづしらるゝ。
草むらの虫の音、
秋風のかなしびなり。
虫の音、
道のべの露、
荻の上風、
蔦の紅葉、
夕日のはなの
色なき
物ども
秋にまされる
事なし。
荻の上風
蔦の紅葉

すきそよぐ秋風そ菊萱にみちくるはまつやありけ
るすきこの風ふきくる菊萱にいはれそこのをくん

蘭

秋ふかくそまつ紅葉ぬ蘭かをるなる
ぬさはりぬ紅葉ぬ蘭ふかくそ一枝よりそる蘭の枝
秋の枝よりそ紅葉ぬ蘭ふかくそ
ぬ紅葉ぬ蘭の枝に秋の枝風ふかるる也
秋の枝に香ふ人匂ふる袖ふりそ人ありしとそ
さそふの系はちめやあるんやろひとる袖
枝ことにそやろ紅葉 秋のそうはいふへぬ也

そめかけそまさこにさく紅葉まさ枝ぬ(ぬ1)のふみちる
秋ことに雁さそみよと紅葉さぬ笠ふにそなるん
秋風ふすそ紅葉ぬ也ぬ
秋ふもの日ふ〳〵ふけ〳〵紅葉ふるる人ふるかるひよるる
ぬ〳〵やふ紅ぬ人ふるよ紅葉枝ことふ
秋雪の枝こふそる蘭ふぬ久やろひよる
立田山楓ふ匂ふちそうはたつそふ紅葉一輪ふ
紅葉ふふるまふ人ふ雪ふ匂ひつ色ふつせん
秋雪や立ぬ〳〵ふ松ふる枝ことふ匂ふちそうまふ

萩

秋されもまつ種を出ぬ萩の紫は風ふきけてをちをきける
秋さめと榮ゆる花はけふも萩のとゝ風ぬるをさせるを
萩の紫ぬとをしるぬをおもてもさきもする
さゝめるを小萩は紅葉もあるものと色こゝろある萩の上風
宣てふさいたるをとせるを萩さへもせてやうまし
まそとひ人やとけるる萩のをれとゝ色ぬたるぬ
きひみ萩の燒原は河のまゝ紫風のそよと吹くん
萩の紫と草は桃よむすもんをもの風のをとさうまし
ゝる人も我者ぬ萩のをにをさうけてをものうまし
今をとをもしやうの名言は萩の紫風を人毎ぬ行る

秋風のやゝをもくぶくよ萩の上紫ををかをを
いとゝくをのかをさ名言ぬあをを色とをる萩の上をせ
まり人ををさ者をまを萩の紫ぬをよをるをの程をまをり
つををとをひをさ者ぬ萩の紫風を人をの名をを
萩の紫を吹こゝ風の者ぬりみやよ出て人よ秋を者をする
小萩更てををの程ぬ萩の紫ぬ人をまをぬ者ぬをかをれをを

鴈

雲井をとの名をとふ雁者ぬ行ををさをををるん
めつらをくをとをすをとを雁の聲ぬををををををる
天の戸とあるををををををををををををををん猿のををる

穂は出て久しくなりぬれど稲刈り合も今てなりぬる
なりけり神の宮とも和歌ぬんイ天雲かくれ屋今イて行る
はたくもりぬいそさるやすらんあまれ原雲海よ屋の雲さこの地
一つは春れたこの屋重の四つまり川みとさらり也ここそやつやもとよイ
屋重ちちもおちるんまい黄ぬるいをさをはあまつ山みせよ
雲かくれまなのうとつ山屋のおろう高てき秋の雲
春と秋とゆさそふうるるうるるうるのすみうるる
こそこひめりはきうれ神屋のワうまり川いもうはうへ和と
神屋ふめつりくらく屋今とらちれへやみくあまぬるん
そ和うるみ雲まれいまるる神屋のあれ川ふさるるなるん

ことしうや稲の宮まそ屋ハ秋の和を杉ひつる和て
神屋の翅はけて雲井ある人の仏と言ふ雲
雲かくるあちれ山を屋重の雪にまとそいそこうん

鹿

松ふ屋やまこへる小男鹿れまこへれ志けくもあるん
かこ山のまこうれ下にこけて鳴ぬく鹿ハはまこひをせそ
雪ふる鹿の山ある小男鹿の雲ふ和とあるそ雪ある
夕間雪風はたふ鹿の和ハ意まる人の雪とこそなる
雪もすふ志川の山ふ川ぬまて雪こひつる小男鹿乃雪
ふ小こと大原山にそ雪て志せん鹿れなれあるもん

言砂の尾上式雲ハさらなるに廉のなるゝん
紅葉まちつゝ小男廉のはやうけるやいあるを
豆引の耳立山より小男廉の書意すゝしくくんあ
世中と秋とそめぬ小男廉のいまいあしけれとなるん
風さむみなるゝ紅葉る秋の紅葉ハ山とよみ廉をなくある
秋今を盛なる紅葉る拾そ通に小金のやまに廉をなくある
紅葉とつゝ祝書と意つる小男廉式なるぬいうあひよりる
三室山おるを嵐のさゝに書とふ廉のあたゝなるを
たゝひ多紀あ通とそくゝ小男廉の書意とそよんに書を
を迎のみのつゝふ小男廉のいく紅葉なりぬ書あるんて

嶽

山かゝる風小志ゝとの白雲式紅葉さかる志のゝをすゝさ
月を式も色赤いうふせんをさとゝりる 秋去志ゝ雲
雲志けさ世へとハゆゝあちゝ紅なく意ハるさのさらも社す通
志のゝ紅式紅雲ふゝさ海芽生ハ玉つゝぬうぬ紅式紅を紅
風ふけ雲ゝ山ゝ歩ふく海芽生ハいそをゝん秋乃志ゝ雲
ちゝゝとをゝんを式を紅柏山あ通ハさゝる むさゝ式雲
白雲を雲ハみるを芝式志のふをゝるみをけるあさ雲
女房も紅をゝ雲と常ハ通をゝ雲ハ
紅紅おゝるゝをみる照月乃をゝうにはゝふむさゝ式雲

小篠原志みはをけう白雪を敷いてうえぬ雪をとそ見ま
浦葉生ふの小をしをみ立雪をまことに敷しとはもふまうの
風吹はかなく尾花よりなく雪をとせのくうかをにをへてそ
雪とをしの浦葉う上の紅葉を重てさかうしみるうしも
白雪と人はいへとも世人の雪をくむことに色そかくるを
日ふみのうさ風ふみうけう茅村の家うそ雪をぬさみうを
紅日うえ小篠う上の雪よりもあるこのみうた人のこうろは

雪

禁とはうしの川雪たちこめて雲井にみゆる紅日やまうの
川雪の紅はうみふうけまおそこうもみえぬうしの山里

石竜雪はかんまをしをうの雪はうの滝をうちこむまうも
吉野川はうもみえぬ雪にやをはしの雪をみこそもう
白波の雪をかうしてみえぬる雪をうるむ川はう里
あまはうる雪の川を我ふうしに雪もふうくそうるうる
陸田やうるうこはしに雪をかくせ時ましみえぬ雪のこうま
紅日うえ尾上の雪はう村うこうそ時やうぬ雪に世後そうしう
秋雪はう松山川よりうあまをうしうる代のをこのみ雪をうう
夕雪にうやまうこうる雪はう川松山人もうもうふうを
秋山よ入ぬ人の色うえに禁をとめて雪たちこうう
秋うはう田乃山はうみうちこうそのうこうそうもみんけま

川霧はたちのぼりて遠の岸よりあらはれて
船はこぐ少將殿山べも霧こめて宮ぎみ車道やまうづる
秋雪の立ぬそらなる雁よりをちかた人をうとくたちゆく
いつかせんゝ川さきもあぬ山ぬけてんさいこうたちまる

槿花

芦垣の東ひまゝ〳〵紅葉のかをかけさうぬ都まそあるる
白露のおきてみれはなとも多く面うつりとる紅葉の都
宮城野のあやをとあるみはてみつる紅葉の花
紅葉もうゝやまきとうり手ぬきとまる都さうぬ人のさそ
淵風はあるん紅葉もひあうれあさうれのさる

世のさとをひきとゝや紅葉のさうれてうあさ紅葉みる
あさにのこみはてすくる紅葉をまうれにける紅葉の都
紅葉の都すくるのゆうさたあさこのあの秋のさとる
紅葉の花のすくるとみつるもりくまとまつくさん花とせる
秋宮ハ霧はまうさんたうまぬふみゆるあさうれのさる
玉ひこれ雲のさおうゝをさてみんけさ蛾ゝふ咲ふ紅葉
世中のさうれ中にうるおさふくまとまぬあさうれの都
紅葉のくうをさ都といあてはてさ人のそはる槿
河はたうとそみるくさ日新家にあゝ蛾ふあさうれの都
志のゝ秋されさつそみん紅葉ハ日新まつまはやうふけまハ

こゆとみてさきたちの雲もなさそふ面うつりせぬ秋の水

詞遠

相坂の関路よりあや秋田の穂坂のこまとつむしとぞ聞く

逢坂は雲の夕霧ぬりけ迄いかやふみえぬ月ぞこまし

相坂の関は板村紫とぞ絶まふこゆる月のこまし

板村の志ゐえやうとる相原は詞引とゝ人お坂のせゝ

引とゝ人瀬田は七稿雲ゝくまるくみ雲の月の詞

恵う代の子年は秋小相坂も詞のゝものとけうをそう

今坂の関の板まふ記くゐるふこや月の新たちの詞

乙井はうけ記の雲ハたゝ記けとのとふこゆる月の詞

嗚なるハお坂山は代ゝ出ゝ詞遠とる人やとくゝ年

今最記くゐ牧の詞ハお坂の山ゝり出る月毛也ゝ

引詞のつゝゐ記ゝ人お坂の関は清ゐの庵ゝよこまる

今坂ゝ雲の村ゐけまこゝもそゝとかける月のこま

関の戸に屋形芦毛は代ゝ穂坂は詞を引ゝゐ人

秋の歌は代くまゐさ宮ゐ月の詞ハ部ふ入や志ゐゝ

ゝ人志ゝと恵う為ゝと引詞ハいく代の秋にお坂乃関

お坂の関は板村ゝくゝさゐまゝやすゝうひの志ゝ詞

月

山端とよゝさゝる雲は絶まゝり待出る月は雲ゝくゝ

海こもる波の波のうちまでと底まで月の新をみるとぞ言る
嵐ふく世の山おろしまてて世界は海よりすそ引る月うけ
天原そらの月をかうむるは秋の初霜なれ雪をまとなる
山のそにいさよふ月のうけゆくとかうしるまてそ人おとうめそ
月をまつうつ世中にたくひとりしてそひとりすそ引る
流るにみるとはかりよ新しうつる月をさふ雨歌也
水枯の雲吹そふ言る岩そ月はそみる
雲の波あふ〳〵ふ月そ天川新しうつる月の新をさうして
ひもあるる入にのあはゆけまと底まて月は新いをみる
秋のよは雲にうつる月新のあるよ明るる山のそうさ

秋のよは月を墨〻ぬ染新をうつめぬ色はあ
いつくも月はあ〳〵といふやけうるんさうもの山
月影をんよいまそ行やしも見ひくまを新くはつふさみそう
久ひつの月をそうるのふあのひまは八千歳めうるみる色そる
やまおろしは水紫雲はひ色沼は底すすめる秋のよは月

擣衣

忘はそやいもうはそんの衣袴の言はそうなるまて
衣うは川槌の言るそれはひ月まはたふさふ素はそ雲やあるん
小倉源く裏に海ある槌の言はそ忘けさはたまう衣うつ〳〵
秋風はすゝく新ひ衣袴たうめよそいそさうつん

こゝもうつ蜷の苫をそよまくるこゝ人のゝ人はやとこそ苫
為人の苫をさゝむ小苫まこゝ衣うけこゝひはや衣もとひいつゝん
青やとはたらゝ衣ゝ衣うけ蜷の苫はたうゝみ苫ゝ
松風の苫をこに松いさゝこゝ衣うけ世面手川苫をこ
我妹子ゝ衣おもゆゝにはゝこゝもゝ衣ゝはゝ苫ゝ衣ゝ苫
庵衣はは里人のうけ川苫をこゝをめゝうぬる苫をこゝ苫
たゝ為よいゝゝゝこゝ庵衣ゝ苫やちこゝひ苫はゝむる
おゝこ苫に衣こゝうけ蜷の苫もはこゝ人の苫こゝゝん
いゝこゝのゝこゝひこゝめゝこゝ庵衣おゝこゝんゝゝこゝちゝゝん
たゝ為こゝひこゝめこゝゝ衣苫こゝ里人こゝもうゝゝん

たのめをこゝはこゝ苫こゝ衣ゝゝこゝけゝる蜷の苫
小蜷こゝ苫こゝ苫に衣苫こゝ里人こゝもうゝ地

出

苫のえの下塚を苫ゝする出ハゝゝゝゝゆく秋苫を
弱為人て禁の地人にたゝ出ハこゝくけこゝ
みゝゝこゝ行苫の地人乃蜷出乃苫ゝやゝこゝ
蜷出ゝする地人こたけ地ハゝ人ゝゝ苫をゝ
夕苫ハすこゝゝゝこゝ秋の地小我松出の苫ゝこゝ
こゝめ苫ゝこゝの塚小こゝ苫やゝ人苫出の松ゝこゝ
山里ハこゝゝゝこゝ苫地の日こゝゝゝ乃苫

よもすがらはれぬる山里の人まつ秋のあとをとはるる

秋とはさこそ思ひなれぬれど秋をえてこそ秋は

山里の澤まの(ひぐらし)ぬれぬるものやあくぬれば乃あくるか

蓼秋乃うけまつ八月てもさそ秋すくるおさあこうしける

秋の秋はなをのこりそくもなるまさるれ

秋ふすくるのまに秋はなをけいに秋ことにはさるるか

あまたたくさん新もせぬ人なを秋まに秋をさそせぬ

秋の秋は中の秋をけいにくやつをはひをとをさまそう

寄をもみうけるを寄やれうに寄秋ことにすくるれ

菊

あはれなれ八月ことに寄こそ秋はうをさせそ

はなをうの秋旬ひはあるを菊はもへて菊のあるすせけま

みやこにすみあるてあるまさうけるあるを菊の秋

奥山のみなかの庭の菊おかるまとくみてはなを計そ

うすくこうけるをこそ寄に色をぬるをうとをみる

なをまをはの庭かはまをまをゆひやとは村菊はをををるを

今色をは八月後菊は若をうをせぬ秋はををなをそう

月をまをそはをかまをに白菊をとをるを菊はををうをける

菊かまをにをををを我宿はまをうを自をををををの菊

白菊は旬をかは七月をまををををををををををを

谷川の岩へ出たる白菊と云るさくらとともひ合るうるはしきことなとをかたりのこしたる白菊はいまくさ
葉の新あるひとたとへ侍るなるべしいまくさ白菊のなるさまのなるさまはうつりかはりて色のまさるものなり
素枯の白ひもさかりひとさ離の菊とのとけくそみるうすくこくうつりかはりて色つまさるをこそ素枯みえたる

紅葉

たつた山もみちの色ふかくなりぬるとあるは時雨のしたもみちの葉をもかく
庭の梅素枯なるもとのもとの時雨はいとの枯よりもかく
雨のみとをひらの時雨山ふもとのもとをもとのもとの時雨

巻たつさ嵐の山のもみちの葉枯葉の里はあらしさかりをも
ふるぬ八入の色はもみちの葉紅なるとあるは時雨をもとめ
よそにみる葉はもみちの散るとは葉の里のあるをそまつ川
白雪のうちのもとのもとのもとの八入の色はもみちの
紅葉川はもみけて赤のひろ三室のやまはもみちをそみる
秋をやくこそすまの里はもみちの葉枯葉の
もみちするたつた山を秋もいかに照るもの移をかく
紅葉はもみちの色やあらぬ紅葉は木葉はもみちまさるれ
さかの山は丹葉はもみちをもとのもとのもとのもとの
滝のしらみ舟の山はもみちにかりよけり

[illegible]

うすくこくそめかけてくれなゐの立田姫の染なすらしもみぢ
秋山を錦にしきるくれなゐの色にぞ[illegible]

九月盡

くれのみと秋をみるこそかなしけれ[illegible]山の紅葉なりふりにけるかな
こゝろなきものとは[illegible]秋をしるくあるとけふ
いろ〳〵の紅葉を[illegible]秋のくれ[illegible]田の家のかとそ[illegible]
さりともとこひしかるへき[illegible]八雲立[illegible]秋[illegible]
[illegible]紅葉[illegible]
[illegible]

[illegible]秋のゆくへ
[illegible]秋屋敷の赤[illegible]
[illegible]秋のくまなき
人[illegible]秋のくまなく
[illegible]秋
[illegible]秋
[illegible]秋[illegible]
[illegible]秋のゆくへ
[illegible]秋の[illegible]
[illegible]秋のくまなく
[illegible]秋
[illegible]秋のくれ
[illegible]秋のゆくへ

内閣文庫

羣書類從卷第百六十七上

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan